

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 16 日現在

機関番号：12613

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2010～2013

課題番号：22520739

研究課題名(和文) アメリカ優生学運動の世界史的考察

研究課題名(英文) Global History of American Eugenics Movement

研究代表者

貴堂 嘉之(KIDO, Yoshiyuki)

一橋大学・大学院社会学研究科・教授

研究者番号：70262095

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円、(間接経費) 990,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、アメリカ合衆国が20世紀前半の国際的な優生学運動を牽引する立場にあったことに注目し、アメリカ優生学運動を一国史的な枠組みではなく、各国との連携、協調、対立に着目してその世界史的意義を問い直した。その際、以下の4つの時代区分に基づき、特徴を整理した。すなわち、1)萌芽期(19世紀末～20世紀初頭)、2)発展期(1910年代～1920年代)、3)成熟期(1920年代から1934年頃)、4)衰退期(1934年頃～戦後初期)である。

研究成果の概要(英文)：This project analyzed the global impact of American eugenics movement on the other countries' eugenical policies and movements. In this analysis, I summarized the characteristics of the American eugenics movement and others through dividing into four periods; 1)embryonic period(late 19th century-early 20th century), 2)developing period(1910's - 1920's), 3)maturation period(1920's - 1934), 4)decline period(1934 - early postwar period).

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・西洋史

キーワード：優生学 人種 社会改良運動 社会保障・福祉 産児調節

1. 研究開始当初の背景

本研究課題を開始するにあたっては、科研費プロジェクト「アメリカ合衆国における優生学と人種秩序の歴史的考察-異人種間結婚禁止法と断種法-」(基盤研究(C)2006年度~2009年度)による以下の三つの成果の上に問題意識がある。第一に、東部・西部・中西部・南部と地域ごとに具体的な課題テーマを設定し、各州レベルでの異人種間結婚禁止法と断種法の立法過程とその法運用の実態を解明し、アメリカの優生思想とその実践に関して最初の実証的な歴史研究を行ったこと。第二に階級論的なホワイトネス研究の限界を乗り越えるために、断種法や異人種間結婚禁止法などのジェンダー的領域の分析を導入し、新たな人種研究へと発展させる足場を築いたこと。第三に、アメリカ例外主義的な自画像を相対化するために、アメリカ合衆国の優生学・優生思想をヨーロッパ・アジアのそれと比較し、世界史的な位相で共通する「共時的近代」なるものをアメリカ史のなかに探っていく作業を行ったこと。以上の三つの成果により多くの新たな知見が得られたと同時に、それらの成果を契機として、あらためてアメリカ優生学運動の世界史的意義を歴史的により大きな文脈のなかで位置づける作業がきわめて重要であるとの認識に至った。二つの世界大戦の影響やナチズムとの関係をめぐるアメリカ優生学の変質の過程や、戦前・戦後の運動の連続/断絶をめぐる議論についてもより実証的に考察する必要があると考え、本研究課題に取り込むことを決めた。

2. 研究の目的

本研究課題は、基盤研究(C)「アメリカ合衆国における優生学と人種秩序の歴史的考察-異人種間結婚禁止法と断種法-」(2006年度~2009年度)の研究成果をもとにその発展課題としての性格を持っている。アメリカ合衆国の国民形成と「人種」秩序の関係を考察する研究の延長線上で、法制度的な優生学関連法案の検証を行い主要な優生学関連施設の分析を行った研究のなかで、19世紀末~20世紀前半の時期においてアメリカ合衆国の優生学運動がドイツのナチス政権の諸政策に影響を与えたばかりでなく、国際的な優生学運動を牽引する立場にあったことをあらためて確認したので、本研究では以下の4つの局面に着目してアメリカ優生学運動のトランスナショナルな性格を検証し、その世界史的意義を問うことを目的に研究を行った。すなわち、第一期・萌芽期(19世紀末~20世紀初頭):イギリスで生まれた優生学が、アメリカにおいて開花し社会ダーウィニズムとともに革新主義期のアメリカで推進される時期、第二期・発展期(1910年代~1920年代):大規模な優生学関連施設が設置され、優生学者が連邦移民行政に大きな影響力を与える時期、第一次世界大戦と優

生学との関連、第三期・成熟期(1920年代~1934年頃):国際的優生学運動を牽引するアメリカ、カリフォルニア優生学のドイツへの影響、転機としての1934年、第四期・変質・衰退期(1934年頃~戦後初期):アメリカ優生学がナチス政権への対応をめくり変質する過程、優生学から遺伝学への転換、戦後へと継承される積極的優生学とベビーブーム、である。

3. 研究の方法

研究方法としては、以下の三つの分析視角を中心に研究を行った。

(1)近代優生学運動のトランスナショナルな広域秩序形成とアメリカ優生学運動の歴史的役割

優生学研究においては、ナチス政権下のドイツにおける安楽死計画やホロコーストなどの優生学的政策の実践から「優生学=ナチズム」という見方が近年までされてきたことから、優生学発祥の地としてのイギリスに関する研究とともにこの両国が研究の主たる対象となってきた。しかし、この両国を「架橋する場」としてアメリカで展開した優生学運動は、トランスナショナルな影響力を持ちつつ、第一次世界大戦以降は国際的な優生学運動を主導する役割を担い、移民排斥・人種差別主義・「生権力」的な国民管理の技法など、グローバルな国際/地域秩序の形成に多大な影響を与えたと考えられる。20世紀初頭に社会改良、福祉・社会保障制度が大西洋を跨いで形成されていく様子は、Daniel Rogers, *Atlantic Crossings: Social Politics in a Progressive Age*(2000)に描かれているが、その中で優生学運動が国境横断的な秩序形成に果たした意義をあらためて検討した。

(2)二つの世界大戦が優生学運動に与えたインパクト-1934年を転機とした優生学の変質過程の実証研究-

前回の科研課題では、東部・西部・中西部・南部での優生学運動の地域偏差分析を行い、各州の断種法制定過程などミクロ的分析に主眼をおいた。しかし、運動全体としては二つの世界大戦が果たした役割が大きいためよりマクロな分析が本課題では重要となる。アメリカでは第一次世界大戦時に軍隊へのIQテスト導入や人種的退化論が議論され、1920年代の「不寛容な時代」を醸成し1924年移民法制定へと連なる活動を優生学者が積極的に行った。またドイツの敗戦によりアメリカが国際的優生学運動を担う契機にもなった点が重要である。また、第二次世界大戦については、ナチス台頭後、1934年にアメリカ優生学協会会長がナチスの断種プログラムを公式に支持する発言を行い、組織内部の混乱を招きこれを契機にアメリカ優生学

は大きな変容を余儀なくされていく。つまり、ナチズムとの関係を戦中においてすら堅持するアメリカの優生学者がいたことを明らかにすることができた。さらに、優生学記録局が1939年に「遺伝学記録局」と改名したことが端的に示すように、優生学運動は戦後社会に生き残りをはかるのだが、その戦前・戦後での連続・不連続の問題を考察した。

(3) アメリカ優生学運動の担い手としての女性の役割 - ジェンダー的視点からの再検討 -

優生学研究では、男性優生学者の科学的実験(薬学・犯罪学・精神医学など)とその政策への応用(移民規制・断種法制定など)に焦点が当てられてきており、優生学運動の担い手としての女性に関する研究は少ない。産児調節運動を主導したマーガレット・サンガーについては、Angela Franks, Margaret Sanger's Eugenic Legacy: The Control of Female Fertility (2005)が登場し、優生学とフェミニズムとの関係への関心は高まっている。本課題では、アメリカ優生学運動の担い手としてより広範な市井の女性達に焦点を当てて、健康優良児(Better Baby)や理想家族(Fitter Family)コンテストの組織者、家系研究調査のソーシャルワーカーとして活躍した女性などを取りあげ、フェミニズム的視点から優生学がそれに与えた歴史的意義を再考した。このことは、戦後に積極的優生学として生き延びた生殖管理の文化を考察することであり、現代アメリカが抱える中絶論争とも交差する課題である。

4. 研究成果

以下、年度別に研究成果を記す。

(1) 2010年度: 4年間の研究プロジェクトを開始した2010年度は、アメリカ優生学運動の四局面の検証作業のうち、第一期のアメリカ優生学運動の萌芽期(19世紀末~20世紀初頭)を重点的に検証するとともに、まず研究遂行上、必須となるアメリカの主要な優生学者・優生学施設・優生学文献のリストを作成し、あわせてアメリカ優生学運動のトランスナショナルな性格を検証する作業の基礎となる、イギリス・ドイツ・日本など各国の優生学運動のデータ収集につとめた。その成果としては、Ruth Engs編の*The Eugenics Movement: An Encyclopedia*(2005)の全項目訳出があり、これを冊子のかたちでまとめた。さらに、2010年に刊行された Ahson Bashford eds, *The Oxford Handbook of the History of Eugenics*(2010)についても、重要項目について訳出を開始した。また、2010年度は、他国の優生学運動の研究をしている大谷誠氏(イギリス・精神薄弱者問題)、藤野豊氏(日本近代史・ハンセン病問題)、細川道久氏(カナダ・優生学運動研究、ホワイイトネス研究)、水戸部由枝氏(ドイツ社会福祉、ジェンダー)

らとの研究交流を持つ機会を得て、多くの知見を得た。

また、2011年3月にはカリフォルニアとニューヨークにて文献調査を行った。カリフォルニアは、全米で最も多くの断種手術が実施された州であり、その中心的機関であった Human Betterment Foundation 人間改良財団(1926-1942)とその設立者 E・S・ゴズニーと主要メンバー、ポール・ポペノー、ディビッド・スター・ジョンソンらの一次史料について集中的に集めた。また、ニューヨークでは、当地で開催された国際優生学会議関連の資料を収集するとともに、コールド・スプリング・ハーバー施設やアメリカ優生学協会関連の資料、産児調節運動の指導者、マーガレット・サンガー関連の資料の収集につとめた。

(2) 2011年度: 4年間の研究プロジェクトの二年目にあたる2011年度は、2010年度に引き続き、研究遂行上、必須となるアメリカの主要な優生学者・優生学施設に関する史料収集とともに、分析対象となるイギリス・ドイツ・日本など各国の優生学運動のデータを集めた。

具体的にはアメリカ優生学運動の四局面の検証作業のうち、第二期のアメリカ優生学運動の発展期(1910年代~1920年代)を重点的に検証した。アメリカの優生学運動の中心となる主要施設が設立され、第一次世界大戦をはさんで、優生学者の影響力が大きくなり、連邦移民行政にも少なからぬ影響を与えるようになるきわめて重要な時期であるが、以下の三点を中心的課題にすえて分析を行うべく、8月に海外調査を実施し、アメリカ東海岸の大学アーカイブや公立文書館に所蔵されている史資料を渉猟した。

移民行政関連史料の発掘: アメリカの移民排斥・ネイティヴィズム論や、移民国別割当制度確立の意思決定過程における優生学者の果たした役割の検証、ドイツなど他国へのアメリカ移民政策の影響の分析

第一次世界大戦と優生学: 第一次世界大戦時の兵士調査(IQテストほか)に関する史料発掘、第一次世界大戦が各国の優生学に与えた影響、とりわけ人種的退化をめぐる議論の検証、ロスロップ・ストッダードによる「白人の内戦」論の分析

女性たちが積極的に参加するようになった優生学運動の展開(健康優良児制度など女性誌による広報の分析)の史的分析、女性参政権の確立と産児調節運動、女性優生学者の分析

(3) 2012年度:

4年間の研究プロジェクトの三年目にあたる2012年度は、研究遂行上、必須となるアメリカの主要な優生学者・優生学施設に関する史料を収集するとともに、分析対象となるイギリス・ドイツ・日本など各国の優生学運動のデータ収集を引き続き進めた。

具体的には、アメリカ優生学運動の四局面の検証作業のうち、第三期のアメリカ優生学運動の成熟期（1920年代～1934年）を重点的に検証した。第二回国際優生学会議がアメリカで開かれるなど第一次世界大戦後には、国際的な優生学運動を牽引する立場にたったアメリカが、国内では優生立法を制度化し、断種手術の数を急増させていく同時代の実態を実証的に考察し、あわせてこのアメリカにおける優生学がヨーロッパ、とりわけナチス・ドイツの社会政策にいかなる影響を与えたのかを考察した。そのため、海外調査を実施し、アメリカ東海岸フィラデルフィアの文書館に所蔵されている史資料を使い、以下の5点を中心的課題にすえて分析を行った。

1921年の第二回国際優生学会議と1932年の第三回国際優生学会議（いずれもニューヨーク開催）の詳細分析

1924年移民法の政策決定過程における優生学者の役割について

各州における優生学断種の実態分析、とりわけカリフォルニアの事例分析

アメリカの優生学者とドイツ優生学者の人的交流史

ナチス・ドイツ政権誕生によるアメリカ優生学団体内部における軋轢

（4）2013年度：

4年間の研究プロジェクトの最終年度にあたる2013年度は、アメリカ優生学運動の四局面の検証作業のうち、第四期のアメリカ優生学運動の衰退期（1934年頃～戦後初期）を重点的に検証した。優生学はすでに第三期において変質を開始し、一部は人口研究へと方向転換し、一部は断種法や婚前結婚検査法、移民制限法の制定へと奔走した。この第四期には、マディソン・グラントやロスロップ・スタッダードらがナチス・ドイツの優生学的断種計画を支援したことから、カーネギー財団などが資金援助をやめ、1930年代後半には有力な優生学団体のいくつかが閉鎖に追い込まれた。

2013年度の研究では、この時期のアメリカとドイツの優生学者の交流を丹念に追いかけて、またアメリカ優生学運動の内部対立の構図を把握することにつとめた。また、世界史的に、「劣等人種」を抹殺し「優等であるアーリア人種」の繁栄を目指すナチスの民族浄化計画が「優生学」と認識されるに至る過程の分析と、ナチスの計画によって、その後の20世紀の優生学がいかなる変質を迫られたのかを考察した。とりわけ、戦後のアメリカで生き延びていく優生学者として、ハリー・ラフリンに着目し、彼らが新たに誕生させた「結婚カウンセリング(marriage counseling)」という職業に焦点をあてて検討した。戦争の結果、勝者のアメリカで生き延びていく優生学と、戦後の国際法廷で裁かれていくナチスの戦争犯罪を検証しながら、

両者の優生学を比較史的に考察した。

この第四期の考察をふまえ、これまでの第一期から第四期までの研究成果を総括して、アメリカ合衆国の優生学運動の世界史的意義を考察した。

5. 主な発表論文等

〔学会発表〕(計 10件)

1. 貴堂嘉之「私の高校世界史教科書づくりと大学での歴史教育」、アメリカ学会年次大会、部会 A 連続企画「アメリカの教え方(教科書を作る)」(東京外国語大学、2013年6月2日)(招聘講演) 東京都

2. 貴堂嘉之「日本帝国崩壊期『引揚げ』の比較研究」5名報告へのコメント、日本移民学会2012年度ワークショップ、(法政大学市ヶ谷キャンパス、2013年3月30日)(招聘講演)、東京都

3. 貴堂嘉之「中国人移民がつくる「移民国家」アメリカ - 奴隷・移民・人種 -」、国際シンポジウム「近代世界と移動する人々の論理 「移民」概念を問い直す」、(日本女子大学新泉山館国際交流センター、2013年1月26日)(招聘講演)、東京都

4. 貴堂嘉之「第3部 Hybridity - 「血」の政治学を越えて」総括コメント、国際シンポジウム「人種神話を解体する」(科研基盤(S)「人種表象の日本型グローバル研究」共催)、(国立京都国際会館、2012年12月16日)(招聘講演)、京都府

5. 貴堂嘉之「人種から読み解くアメリカ史 - アジア系移民と「移民国家」アメリカ -」、長野県高校歴史教育研究会、(長野県塩尻志学館高校、2012年12月9日)(招聘講演) 長野県

6. 貴堂嘉之「移民国家アメリカのシティズンシップ再考 - 「長い19世紀」のヒトの移動のグローバル・ヒストリーから -」、日本アメリカ史学会第9回(通算37回)年次大会、(一橋大学、2012年9月23日)(招聘講演)、東京都

7. 貴堂嘉之「アメリカ合衆国における人種混交幻想 - 奴隷解放とアジア系移民排斥」、日本西洋史学会第62回大会シンポジウム「西洋文明と他者 - 比較の中の人種意識 -」、(明治大学駿河台キャンパス、2012年5月20日)(招聘講演)、東京都

8. 貴堂嘉之「20世紀前半の英国における「精神薄弱者問題」(大谷誠)へのコメント、現代史研究会、(共立女子大学、2011年1月29日)(招聘講演) 東京都

9. 貴堂嘉之 「他者の死を扱うということ」
(坂下史子)「銀行利用者リストから垣間見える紐帯」(樋口映美)へのコメント、研究報告会「人種・歴史・表象」日本アメリカ史学会第20回例会(専修大学、2010年12月4日)(招聘講演)東京都

10. 貴堂嘉之 「アメリカにおける奴隷解放と人種論」, 科研共同研究「近代移行期における奴隷・移住者・混血者」シンポジウム, (立教大学、2010年9月19日)(招聘講演)東京都

〔図書〕(計 7 件)

1. 貴堂嘉之 「南北戦争と『再建の時代』」和田光弘編『大学で学ぶアメリカ史』(ミネルヴァ書房、2014年)115-137頁、344頁

2. 貴堂嘉之 「エンジェル島移民博物館」北米エスニシティ研究会編『北米の小さな博物館3』(彩流社、2014年)2-11頁、328頁

3. 貴堂嘉之 第一部序論「近代における奴隷と自由」; 「奴隷解放と人種主義のグローバル・ヒストリー 「奴隷国家」から「移民国家」へのアメリカ合衆国の変容」弘末雅士編『越境者の世界史 奴隷・移住者・混血者』(春風社、2013年)15-19; 83-97頁、312頁

4. 貴堂嘉之 「健康優良コンテスト狂想曲 革新主義期の「科学」とアメリカ優生学運動」樋口映美・貴堂嘉之・日暮美奈子編『<近代規範>の社会史 都市・身体・国家』(彩流社、2013年)3-6, 137-161頁、352頁

5. 貴堂嘉之 『高校世界史 B(平成25年新課程)』(共著)(実教出版、2013年)264頁

6. 貴堂嘉之 『アメリカ合衆国と中国人移民-歴史のなかの「移民国家」アメリカ-』(名古屋大学出版会、2012年)364頁

7. 木本喜美子・貴堂嘉之(編)『ジェンダーと社会-男性史・軍隊・セクシュアリティ』(旬報社、2010年)392頁

〔その他〕

ホームページ等

<http://www.soc.hit-u.ac.jp/~kido/>

6. 研究組織

(1)研究代表者

貴堂嘉之 (KIDO, Yoshiyuki)

一橋大学・大学院社会学研究科・教授

研究者番号: 70262095